

26
2016. 5

薬友会報

千葉大学薬友会



薬学部 医薬系総合研究棟 I



薬学部 医薬系総合研究棟 II と屋根飾り

薬友会長・研究院長挨拶……………	2	学部だより……………	21
退任のご挨拶……………	2	教員の異動……………	21
新任教授ご挨拶……………	3	大学院医学薬学府入学者の状況……………	21
会員便り……………	5	薬剤師国家試験合格状況……………	21
薬学部この一年……………	7	卒業生・修了生の進路……………	22
研究室便り……………	9	薬学部入学者の状況……………	22
クラス通信……………	15	今年度の受賞記録……………	22
支部便り……………	19	薬友会より……………	23
サークル紹介……………	20	薬友会生涯教育セミナー……………	24
		編集後記……………	24



薬友会員の皆様におかれましては、益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。平成28年度より2年間、薬学研究院長・薬学部長を拝命いたしました。昭和60年に助手として本学部へ奉職以来、早31年が経過し薬学部教員および教授の任用年数では最古参になってしまいました。皆様への恩返しのため微力ながらできる限りの努力を致したいと思っておりますので、どうぞ叱咤激励をお願い申し上げます。

教育活動面での本学部・研究院の昨年度来の主な動きを述べますと、まず本学部の6年制薬学科の教育に関して薬学教育評価機構による第三者評価が実施されました。おかげさまで、何点かの改善へのコメントは付されましたが無事終了いたしました。関わって頂きました関係者の皆様のご努力に感謝申し上げます。また、博士ダブルディグリープログラムがタイ王国シルパコン大学薬学研究科に加えて、同マヒドン大学薬学研究科の間にも協定が交わされ、近いうちに最初のダブルディグリー学生が修了する予定です。これは単に2つの学位が取得できるだけではなく、専門分野に関する理解、異文化圏への理解が深まるという点で、国際的人材育成に重要な役割を果たすと期待されます。また、プロジェクト経費による外国人特任教員が国際創薬学研究室に2名配置され、ネイティブ英語での講義や演習が行われています。さらに、昨年度始めて秋入学（帰国子女入試）の学部学生を迎え入れ、入学試験や入学者の多様化が進みました。本年の薬学部一般入試の競争率は前期日程が6.7倍、後期日程が29.9倍でいずれも千葉大学全10学部の中で最も高い競争率を誇っています。

研究活動面での動きを述べますと、千葉大学は本年度から始まりました6年間の国立大学法人の第3期中期目標・中期計画では、いわゆる第3群という「全学的に海外大学と伍して卓越した教育研究」を行う卓越研究大学のカテゴリーに分類されました。このために、中期目標期間中に卓越研究として本学をリードする6研究課題が、戦略的重点研究強化プログラムとして学長主導により審査を経て選定されました。幸いなことに、本研究院の教員がコアメンバーとして提案した「ファイトケミカル植物分子科学」がその一つに採択されました。< <http://www.chiba-u.ac.jp/research/> >この他、中堅若手教員が中心となって提案した次世代卓越研究であるリーディング研究育成プログラムに1課題が次年度以降の研究推進の候補に選定されました。

昨年6月以降の人事面での主な動きとしては、昨年3月に定年退職された山本友子教授（微生物薬品化学研究室）の後任として川島博人教授が昨年8月に着任され、本年3月に定年退職された千葉寛教授（薬物学研究室）の後任として秋田英万教授が本年4月に着任いたしました。さらに、医薬品情報学（マツモトキヨシHD）寄附講座の山下純特任教授の後任として神崎哲人特任教授が本年4月に着任いたしました。

教職員一同、本学部・研究院の発展と学部学生・大学院生・薬友会員のために全力を尽くしたいと思いますので、薬友会員の皆様のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

退任のご挨拶



平成8年5月に千葉大学薬学部薬物学研究室に教授として赴任して以来、20年の長きにわたり、多くの皆様からご指導とご支援をいただきましたが、本年3月末をもちまして無事に定年退職を迎えることができましたことを心より御礼申し上げます。

私は昭和45年に千葉大学薬学部へ入学し、故北川晴雄教授が主宰されていた薬物学研究室で修士課程を修了した後、国立病院医療センター・臨床研究部・臨床薬理室の研究員として抗てんかん薬の薬物動態に関する研究により学位を取得し、博士研究員としてカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）に2年間留学しました。UCSFではパーキンソン病惹起物質であるMPTPの代謝と神経毒性に関する研究を行い、帰国後は研究室長として、CYPを中心としたヒトの薬物代謝と薬物動態に関する臨床薬理学の研究に従事しました。その後、縁あって佐藤哲男教授（現千葉大学名誉教授）の後任として、出身研究室に戻ることができました。

着任後は、それまで行ってきたヒトにおける薬物代謝の研究を継続・発展させるとともに、医薬品の副作用発現と遺伝子多型の関係に関する研究を進展させました。最近の10年間は、研究室のスタッフを中心に、ヒト型動物による薬物代謝の研究、ヒトCYPの生理的役割に関する研究、不死化細胞による血液脳関門評価系の構築など、薬物動態の新しい分野へ研究を発展させることができました。幸いなことに薬物学研究室には毎年優秀な学生が集まり、熱心に研究活動に励んでくれたこともあり、多くの有能な人材を社会に送り出すことができたことは、私の誇りであるとともに大きな喜びです。

研究・教育以外の活動では、日本薬物動態学会の英文誌編集委員長、理事、年会長、会長として学会の運営に微力ながら貢献できたように思います。日本の薬物動態学は国際的に見ても高いレベルにあり、千葉大学薬学部出身の研究者がその発展の一翼を担ってきました。これからも若い研究者が千葉大学薬学部の伝統を引き継ぎ、日本の薬物動態学をさらに発展させて欲しいと思います。

母校で後輩たちの研究・教育に携わることができたこの20年間は、大変やりがいのある、充実した日々でした。お世話になりました方々に改めて感謝申し上げるとともに、千葉大学薬学部の今後益々の発展を祈念しております。



新任のご挨拶

秋田 英万

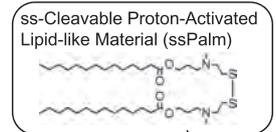


略歴

平成14年 東大院・薬博・修了、北海道大学大学院薬学研究院にて助教、准教授を経て現職

平成28年4月1日付けで、千葉寛教授の後任として千葉大学大学院薬学研究院、薬物学研究室教授を拝命致しました。半世紀以上にもわたり、動態・代謝の研究領域を中心に著名な先生方を輩出した伝統ある研究室の教授を引き継がせていただく機会を得て、身の引き締まる思いが致しております。薬友会報の紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は、東京大学大学院薬学系研究科に在学中、杉山雄一先生の御指導のもとでトランスポーターの研究に従事しながら、薬物動態学や分子生物学を学びました。平成14年に学位を取得後、北海道大学大学院薬学研究科の原島秀吉研究室で助手として採用いただきました。学生時代は主に、低分子薬物の体内動態が解析の中心でありましたが、北海道大学では、次世代医療としての遺伝子・核酸治療の実現を見据え、細胞内動態が興味の対象となりました。自ら開発した細胞内動態の定量法を用い、また、ウイルスベクターと比較を行いながら人工ベクターの細胞内動態を解析した結果、従来から、広くデリバリー用材料として用いられてきた正電荷材料が、細胞内に入った後には転写・翻訳過程を阻害する諸悪の根源となることを見出しました。この問題点を克服するため、細胞内の環境に応答しながら、特定の小器官だけで正に帯電し、また自己崩壊する脂質様材料 (ssPalm) と、本材料から形成されるナノ粒子を開発し、実用化を目指した研究しております。



遺伝子
核酸

低分子

薬物学研究室では、ゲノム薬理や細胞・分子生物学の考え方を取り入れながら、低分子薬物の動態、さらには薬効・毒性の個体差を解明する研究が行われて参りました。私は、ドラッグデリバリー技術を研鑽しながらも、高分子さらにはナノ医薬 (リポソーム製剤など) の動態における個体差を生み出す要因を解明してみたいと考えています。また、薬物動態を「解析」し、「予測」するだけでなく、動きを「制御」する技術を取り入れた薬物学を切り拓きたいと考えております。また、新たな医療原理を薬理学的観点から考案し、体内・細胞内における動態学的な解析/予測をしながら製剤の設計し、具現化できる。これらの一連の流れを担える人材を育成したいと考えています。薬友会会員の皆様からのご支援をお願い申し上げます。

Akita H., Ishiba, Hatakeyama H., Tanaka H., Sato Y., Tange K., Arai M., Kubo K. Harashima H. A neutral envelope-type nanoparticle containing pH-responsive and SS-cleavable lipid-like materials as a carrier for plasmid DNA. *Adv Healthcare Mater.* 2: 1120-25 (2013)

Miura N, Shaheen SM, Akita H.(Equal contribution to 1st author), Nakamura T, Harashima H, A KALA-modified lipid nanoparticle containing CpG-free plasmid DNA as a potential DNA vaccine carrier for antigen presentation and as an immune-stimulative adjuvant. *Nucleic Acids Res.* 43(3):1317-31 (2015)

新任のご挨拶

神崎 哲人



略歴

昭和55年千葉大学医学部卒業、国立精神・神経センター国府台病院内科勤務、平成19年より千葉科学大学薬学部臨床医学研究室教授を経て現職

平成28年4月1日付けで千葉大学大学院薬学研究院寄附講座 医薬品情報学の特任教授を拝命致しました。本講座は、国立大学法人千葉大学と株式会社マツモトキヨシホールディングスが高齢化社会の急速な進展や医薬分業の推進により、多様化する保険薬局業務に対して各種対応が重要であるとの共通認識から、医薬品適正使用の普及、地域医療への貢献、医療関連サービスの充実を目的に平成25年に設置されました。このような産学連携の講座では、大学として教育・研究の役割を十分に果たすことは当然ですが、大学と企業との共同研究を進めることも重要です。

私は本学医学部を卒業後、内科学第二講座 (現細胞治療内科学) に入局いたしました。その後、多くの先生方から動脈硬化学の基礎・臨床のみならず、科学のあり方、その精神についてご指導を賜りました。さらに、スウェーデン国ウプサラ市ルードウック癌研究所のヘルディン教授のもとでTGF-β結合蛋白の研究に従事させていただきました。その後、成田空港検疫所の医療職、国立精神・神経センター国府台病院内科で臨床経験を積みながら、当時の本学薬学部医薬品情報学の上田教授のもとでTGF-β結合蛋白の研究を続けさせていただきました。平成19年4月からは千葉科学大学薬学部臨床医学研究室で主に教育と動脈硬化性疾患の臨床研究に取り組んでまいりました。

研究テーマは、TGF-βと動脈硬化症の血管壁細胞の性質変化、精神疾患患者における動脈硬化性疾患の実態の解明など、いずれも動脈硬化症の基礎・臨床に関係しています。動脈硬化症は多くの危険因子(外因)を取り除いても、その発症・進展をゼロにすることはできません。個々の血管壁細胞の性質(内因)を解明することにより、動脈硬化症をさらに深く理解し、その対策を立てられるものと思います。

現在、急速な高齢化社会の到来とともに、求められる医療・医療人は急速に変化しています。将来のどのような変化にも対応できる医療人を育成することは、私たちの非常に重要な任務です。さらに、本講座の特徴である企業との共同研究を進展させ産学連携を着実に進めていく所存ですので、皆様方からのご支援、ご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。



主要論文

1. Kanazaki T, Olofsson A, Moren A et al: TGF-β1 binding protein: a component of the large latent complex of TGF-β1 with multiple repeat sequences. *Cell* 61, 1051-1061 (1990).
2. Tetsuto Kanazaki, Yoriyasu Uju, Kazumi Tsukada et al: Increased silent brain infarction accompanied with high prevalence of diabetes and dyslipidemia in psychiatric inpatients: a cross-sectional study. *The Primary Care Companion for CNS disorders* 17, 115-121 (2015).

会 員 便 り

高橋千代美（日本医薬情報センター）



小生は千葉大学薬学部を卒業後、三共株式会社（現第一三共株式会社）に入社し、30年は薬事関係を、その後10年は安全性関係の仕事に就きました。その間、業界では東薬工業事法規委員会委員長、日薬連薬制委員会委員長および安全性委員会委員長を務めました。安全性委員会委員長時代は「薬害肝炎事件の検証及び再発防止のための医薬品行政のあり方検討委員会」の業界代表委員として参画し貴重な経験をしました。現在は日本医薬情報センターで英文報告の和訳チェックなどを行っております。さて、小生が入社後まもなく東薬工業事法規委員会が主体となって千葉大学卒業生の情報交換の場として「法規るのはな会」が発足しました。本会は、極めて限定的な会員で長期間開催していましたが、2年前、「RS（レギュラトリーサイエンス）に関する業務を遂行している産官学各方面の会員の相互の親睦と会員の向上に資するとともに、RSの発展に寄与すること」を目的に「RSのはな会」と名称を変更いたしました。会員資格も薬学部教職員、旧教職員、薬学部卒業生、薬学部専攻科修了生、大学院薬学研究科修了生などと大変広くなっております。年1回の七夕行事ではありますが、毎年多くの会員の参加を頂いております。今年も7月に開催いたしますので、参加を希望される方は是非奮ってご参加いただきたいと思います。（昭和46年卒業）

齋藤 宏暢（第一三共株式会社 癌臨床開発部長）



第一三共に入社し、今年でちょうど30年になります。現在、臨床試験・薬事申請の業務に携わるとともに、製薬協のICH委員長、Drug Information Association (DIA) のSteering Committeeメンバーとして、業界団体・学会の活動にも参加しています。ICHおよびDIAでの活動はともにGlobalでのCommunicationが土台となっており、欧米はもちろんのことアジア・中南米も含め新薬開発に携わる方々と世界の患者のためにどういう薬剤が必要か、必要な薬剤を一日でも早く患者さんに届けるにはどうすべきかを議論する場であり、社会貢献という気持ちを直に感じることができる自分の大事なプラットフォームです。社内外での活動では本当に多くの千葉大の先輩、後輩と一緒にあります。黒川達夫先輩や高橋千代美先輩、たくさんの方の後輩達。DIAではStudent Sessionという学生とのGlobal交流を目的とした勉強会を立ち上げ、医薬品に一番大事な「添付文書」を各方面の専門家と一緒に作り方・読み方を勉強しています。また、その活動を通して忘れてかけていた学生時代の「熱い思い」を実感しています。ここでも千葉大生が活躍しています。これからの日本を背負って立つ学生達の気概と心意気に乾杯。。。 （昭和59年卒業）

生城山勝巳（千葉科学大学 薬学部 教授）



私が薬学部に入社したのは1984年、ロサンゼルスオリンピックで、カール・ルイスや柔道の山下・斉藤の両選手が大活躍した年でした（懐かしい！）。4年次から大学院修士までの計3年間は生物薬剤学研究室に所属し、卒業後は迷わずに病院薬剤師の道に進みました。卒業後10年ほど経過し、千葉大近くの病院に移って薬学生の病院実習指導も軌道に乗ってきた頃、上野光一先生（高齢者薬剤学）のお誘いで大学院博士課程に在籍する機会をいただきました。現在は千葉科学大学薬学部・臨床薬剤学研究室に臨床系（実務家）教員として勤務しています。その傍ら、月に数回は病院に行き患者さんに接し、薬剤管理指導業務などを行っています。

千葉大学との最近の関係では、千葉大学、城西国際大学、千葉科学大学による3大学連携教育において、救急・集中治療ならびに災害医療分野の主担当教員の一人として関わっています。毎年8月に3大学の学生が銚子に集まり、実践形式の演習を行います。高級外車に匹敵する価格の患者シミュレータを本学薬学部複数台配備していただき、実践・体験型の学生教育に活用しています。知識と技能を融合させる教育を行なう上で、患者シミュレータはとても便利なツールです。今年の8月も、シミュレータと一緒に皆様のお越しをお待ちしています。（昭和63年卒業）

渡邊 伸一（帝京平成大学薬学部 教授）



私が大学院修士課程を修了した平成3年前後に研究室に所属していた先生、先輩などに連絡し、「臨床化学研究室平成3年くらい卒業者の会」と称して、昨年と今年の1月2日に懇親会を開催しました。五十嵐先生にご出席いただき、昨年は9人、今年は7人が集まりました。私自身は、2年前の7月に勤務先が大学になるという環境の変化がありましたが、懇親会に出席した大学に勤務している先輩から、薬剤師を養成する役割がより大きくなった6年制の薬学部において生化学の分野で研究を進めている状況など、さまざまな話をうかがえ、楽しい時間を過ごせるとともに、大学勤務に有用な情報を得ることができました。同じ研究室に在籍した方々と、気楽に情報交換できる場を持てるのは、ありがたく感じます。歳をとったせいもあり、このような場を、ますます楽しいと思うようになってきたので、来年以降も1月2日に懇親会を継続して開催したいと考えています。この「会員便り」を見て、臨床化学研究室（病態生化学研究室）に所属していたけど連絡がないぞ！という卒業生は、私の勤務先まで電話で連絡ください。

平成元年卒業（85P）の同期会も、私が次回の幹事を担当します。今回は今年の秋頃に開催したいと考えています。昨年は、連絡先不明の方々もいたようですので、昨年の同期会の連絡がなかった85Pの卒業生は、私の勤務先まで電話で連絡ください。（平成元年卒業）

江原 輝喜（独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA））



修士課程修了後に厚生省に入省して20余年が過ぎました。入省当時、厚生行政は国内行政だから英語は不要ともいわれ、職場のパソコン（PC）は室内共用1台だけでした。ところが、あつという間に国際化とIT化が進み、PMDAでは海外規制当局と頻繁にメールや電話会議をし、PC画面で審査しています。お役所以外ではもっと国際化・IT化が進んでいるものと思います。

IT化と国際化で思い出すのが、大学の英語講義テキストだった南雲堂の副読本「MEGATRENDS」です。1982年刊行のベストセラー「Megatrends (John Naisbitt著)」から一部抜粋した簡略版ですが、この中で描かれているポスト工業化社会の未来予想図は今も色あせていません。コンピューターが社会に与える影響を予言しつつ、情報化社会における「high touch（人間性）」と「教育」の重要性を指摘しています。

数年前に本棚の奥から出てきて懐かしく読み直しました。特に気に入っているのは結論で、「変遷期は不確定だが、チャンスに満ちた時代でもある。生きているのになんてすばらしい時代なのだろう。」との趣旨で結んでいてポジティブな考え方が魅力的です。原書でもっと勉強していたらIT企業の創業者になれていたかもしれません。

千葉大学出身者はPMDA専門員のかなりの割合を占めていますし、医学研究院はPMDAと連携大学院協定を締結しています。このテキストに象徴される先進的教育@千葉大学に感謝するとともに、更なる国際性・先見性のあるアカデミアとして期待しております。（平成3年卒業）

和泉（松本） 早矢香（亀田総合病院 薬剤部）



私は学部4年から修士2年まで、薬物学研究室にてご指導いただきました。修了後、千葉県鴨川市にある亀田総合病院の薬剤師レジデントとして2年間研修し、その後薬剤部に勤務しています。薬物学研究室ではCYPやOATPの遺伝子発現に関する研究を行っていました。3年間の研究生活により問題解決能力やプレゼンテーションスキル、諦めない精神力が養われたと実感しています。現在は神経内科病棟の専任薬剤師として多職種による脳梗塞再発予防教室の開催、栄養サポートチームへの参加、心臓血管外科におけるプロトコルに基づくワルファリンの薬物治療管理などに携わっています。病棟では、多数の薬剤が処方されている患者さまや大量の残薬を持参される患者さまにしばしば出会います。老々介護や高齢独居の現状も目の当たりにすることが多いです。これらの患者さまに対し、医師や看護師、管理栄養士、作業療法士、ソーシャルワーカーなどと連携し指導を行っています。患者さまの治療上の問題点を解決するには、多職種の協力が必須であると実感する毎日です。超高齢社会を見据え、今後は病院薬剤師だけでなく地域の薬局薬剤師とも連携し、漫然と投与されている薬剤の削減やコンプライアンス向上による残薬削減に取り組んでいきたいと思っております。

（平成20年卒業）

薬学部この一年

文部科学省大学間連携教育推進事業「実践社会博学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」学生成果発表会



薬剤師の役割を学んだ際の充実した体験が発表されました。本プログラムもいよいよ次年度が最終年度です。引き続き、ご支援のほど宜しくお願いいたします。

平成24年度文部科学省により採択された本プログラムも4年目に入り、新しい時代に即した薬剤師教育の開発を目指し、成果を広く社会に公表しております。平成27年度は10月18日（日）に薬学部創立120周年記念講堂にて「未来医療を担う学生成果発表会」を開催しました。二件の特別講演に続き、本プログラムの受講生と、コース修了生による成果発表が行われ、さらに特別講演者、発表者を交えたパネル討論を行いました(写真)。学生による成果発表では大学の通常の講義では学べない、在宅医療の現場における実践的な学習内容や、緊急時・災害時における

国際交流の現況

本年度は博士ダブルディグリー協定による初めての学位取得者を輩出し、協定校との交流内容も具体的な成果として現れています。更に千葉大学は「国際化」を目標に掲げ、在校生の留学推進、留學生の受入れを積極的に行っています。本年1月に米国コンコルディア大学薬学部から学部長一行が本学を訪問され、学術交流を開始することが約束されました。これまで深い交流実績をもつ協定校との関係を更に深めるとともに、新たに欧米諸国の薬学系大学との交流協定を締結し、より質の高い薬学教育環境の整備に努めていく所存です。今後益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



コンコルディア大学薬学部一行の表敬訪問(平成28年1月27日)



秋入学試験(薬科学科限定)の導入

千葉大薬学部では、海外の高校卒業時期に合わせた帰国子女向け秋入学試験(薬科学科限定)を、全国に先駆けて2013年度入試から行っています。受験者は毎年おりましたが、これまで合格者はゼロでした。しかし、このたび初の合格者が出て、昨年9月に入学しました。本制度による全国初の薬学部入学者です。入学後1ヶ月間のマンツーマン集中講義・補習を受け、10月以降は通常の4月入学者に合流しています。この後、学業成績が一定の基準を満たせば3年半での早期卒業、つまり多くの同級生と一緒に3月に卒業することも可能となっています。

ニンニクの含硫黄薬用成分生合成の鍵酵素遺伝子の同定

ニンニクの発癌抑制効果や循環器疾患改善効果は、ニンニクが生合成する含硫黄成分「アリイン」に起因します。遺伝子資源応用研究室では、ネギ属植物の遺伝子配列群の生物情報学的解析に基づき、アリイン生合成経路の最終段階において生合成中間体の硫黄原子を酸化する酵素をコードする遺伝子を同定しました。将来的には、この遺伝子を導入した植物や微生物を利用したアリイン等の含硫黄化合物の効率的生産や創薬への展開、健康機能を有する含硫黄化合物を多く含むニンニクの育種など産業への応用が期待できます。



2015 SciFinder Future Leaders in Chemistry プログラムに薬学部博士課程中島誠也君が選考されました



写真：米国オハイオ州コロンバスのCAS本部にて。
後列右から二人目が中島君。

アメリカ化学会の一部門である Chemical Abstract Service (CAS) が主催する世界中の博士課程学生を対象とした「SciFinder Future Leaders in Chemistry プログラム」に博士課程2年中島誠也君が見事に日本代表として選抜され、世界中から選考された20名の代表の一人としてプログラムに参加しました。千葉大学からは初めての選抜です。本プログラムでは8月10～15日米国オハイオ州コロンバスにある CAS を訪問し、化学情報利用について情報交換を行い、オハイオ州立大学などの見学も行われました。さらに8月16～20日ボストンで開催された米国化学会年会にも参加しました。中島君のインタビュー記事は日本化学会機関誌に掲載されています。(化学と工業、68巻、12月号、1107ページ、2015年)

「6年制薬学教育評価」の結果について

薬学教育の年限延長に伴い、教育の質の保証を目的とした分野別評価、いわゆる第三者評価の実施が要請されています。薬学教育評価機構による本評価は平成24年度から始まりました。千葉大学は平成27年度が評価実施年度で、その結果、千葉大学薬学部薬学科（6年制薬学教育プログラム）は、薬学教育評価機構が定める「薬学教育評価 評価基準」に適合していると認定されました。認定の期間は、2023（平成35）年3月31日までです。千葉大学薬学部は今後も薬学教育プログラムの質的向上に取り組んでいきます。



成績優秀賞・修士論文優秀発表者が決定



4年博士課程 幸龍三郎さん、修士課程 伊藤涼さんが医学薬学府長表彰成績優秀賞を受賞しました。受賞者は、3月25日の学位記伝達式において表彰されました。また、平成25年度修士論文発表会からの試みとして、優秀な発表を行った学生に対して「修士論文優秀発表賞」を実施しております。選考では、研究内容、発表内容、発表態度、質疑応答等が審査されます。平成28年2月29日、3月1日に行われた修士論文発表会では、昨年度に負けず劣らず素晴らしい発表がされました。今年度は、伊藤涼さん、金屋晴信さん、河野将人さん、滋賀直樹さん、田口翔大さんの発表が優秀発表賞に選ばれました。伊藤さんはなんとダブル受賞です！3月25日の学位記伝達式の際に行われた表彰式では、表彰状と記念品が授与されました。

第10回薬学部ソフトボール大会を開催

今年も毎年恒例となりましたソフトボール大会が8月27日～29日に開催されました。第11回となる今年は、15チーム（合同チームもありますので、19研究室）が参加し、白熱した試合が繰り広げられました。年々試合のレベルが上がってきていると感じます。研究室によっては、教授の先生も参加したり、応援に駆けついたり、普段の研究生活等を忘れてリフレッシュするとともに、研究室間での交友を深めました。今年の優勝は最強村山軍団（薬効薬理学研究室）、準優勝は薬化学研究室でした。今年もまた楽しみですね！



研究室便り

薬品物理化学

島根大学総合理工学部講師として栄転された鈴木優章助教の後任として、京都大学理学部の博士課程を終えたばかりの米田友貴助教が平成27年4月より赴任しました。28年4月現在、職員3名と大学院生・学部生15名の総勢18名が在籍しています。研究室では生物無機化学解析や計算科学手法による創薬研究を進めており、昨年度はBiochemistry, Inorg. Chem., Bioorg. Med. Chem., J. Chem. Inform. Modelなどの国際誌に論文を発表しました。

博士課程の不動聡志君が28年3月に学位を無事取得し、4月からフィンランドのヘルシンキ大学に博士研究員として赴任しました。イラン人留学生のMajid Vahedさんは27年4月から、中国人留学生の齊非さんは27年10月から、それぞれ博士課程に進学して活発な研究を展開しています。修士課程を修了した近藤君や阪田君は無事に製薬会社などに就職し、薬学科を卒業した林さんと渡部さんは公務員や薬剤師として活躍しています。教員と学生は講義や実験などの多忙な日々を追われながらも、研究室旅行や定期コンパなど、研究以外の活動も楽しんでいきます。



遺伝子資源応用

本年度も齊藤和季教授のもと、一同、研究活動に励んでおります。当研究室は、植物が生産する薬理活性や健康機能性を有する代謝産物について、植物のゲノム機能科学研究からこれらの生合成に関わる遺伝子の解明とそのバイオテクノロジー応用を目的とした研究に取り組んでいます。平成27年度も多くの研究成果をあげ、学術論文や学会で発表を行いました。平成27年10月からは、齊藤教授を推進責任者とした千葉大学戦略的重点研究強化プログラム「ファイトケミカル植物分子科学」を生体機能性分子研究室や活性構造化学研究室、他学部研究室と連携して進めています。これにより、植物が生産する多様なファイトケミカルに関する分子科学的な原理の解明を、より効率的に推進できると考えています。最近の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト

(<http://www.p.chiba-u.jp/lab/idenshi/>) をご覧下さい。薬学基礎研究の発展に貢献すべく日々努力しておりますので、今後とも温かいご支援をお願い申し上げます。



分子細胞生物学

本年度は、教員3名、博士7名、修士8名と学部生8名が在籍し、がん細胞のシグナル伝達の研究に取り組んでいます。特に、核内チロシンキナーゼシグナリングによるクロマチンダイナミクスとエピジェネティクスの制御、DNA傷害によるチロシンリン酸化シグナリングの役割、細胞分裂におけるチロシンキナーゼの役割などの研究が進んでいます。第135回日本薬学会では、米谷詩織さん、長谷川仁美さん、森井真理子さん、幸龍三郎君が優秀発表賞に選ばれ、第14回次世代を担う若手ファーマ・バイオフィォラム2015では本田拓也君が優秀発表賞に選ばれました。さらに、千葉大学博士課程教育リーディングプログラム第1期生の本田拓也君と森井真理子さんが学振特別研究員DC2に採用されました。研究室の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト

(<http://www.p.chiba-u.jp/lab/maku/index.html>) をご

覧下さい。教室員全員で頑張っておりますので、卒業生の皆様、お気軽にお立寄りください。



環境リスク（国立環境研究所）

環境リスク研究室（平野研）は、国立環境研究所内にあり、博士課程と修士課程の大学院生が一名ずつ在籍しています。研究テーマは、①「ヒ素化合物の代謝機構と細胞への作用機序の解明」と、②「カーボンナノチューブ、銀粒子、二次生成粒子、PM2.5など粒子状物質の生体影響機構の解明」の2つに大きく分かれます。ヒ素の研究では、チオール基への結合とRING

フィンガードメインを持つPMLタンパク質の修飾に注目しています。また、粒子の研究では貪食レセプターに注目して研究を進めています。ナノトキシロジー分野では、海外からの共同研究者や研究生も一緒に研究を進めています。プラズマ質量分析計などの機器を用いた測定・分析結果と、細胞生物学的手法を用いた遺伝子やタンパク質の変化をもとに、培養細胞や実験動物における環境有害物質の生体作用機序を解明することを目指しています。



かずさDNA研究所（遺伝子創薬学）

遺伝子創薬研究室は、かずさDNA研究所との連携講座としてできました。研究内容を簡単にご紹介しますと、1) 中山らは、新しい部位特異的組み換えシステムを開発してゲノム中の特定の遺伝子や領域を人工的に変えるゲノム改変技術開発、2) 鈴木らは、新型シーケンサーによるトランスクリプトーム解析及び新型質量分析機器によるメタボローム解析を通して、機能性代謝物の生合成研究及びトランスオミクス統合解析における新しい解析手法の技術開発、3) 大関らは、染色体の分配機構に必須なセントロメアの研究を通じて、ヒト人工染色体の開発と応用を行っています。当研究室は、生命のゲノム情報を基に、生体システムの理解を目指す「ゲノミクス」と呼ばれるアプローチを創薬に活用します。特に、近年のDNA塩基配列決定技術や質量分析技術を駆使した最先端分析技術を開発することで、新しい創薬への道筋を生み出せたらと



願って研究に励んでおります。ご興味があれば、ぜひ一度かずさDNA研究所にご訪問ください。

薬効薬理学

現在（平成28年2月）、職員3名と学生19名「博士課程2、修士課程2年4、同1年4（他1名休学中）、学部4年4（薬学2、薬科学2）、3年5（薬学2、薬科学3）」が在籍しています。3月末には修士2年が修了・就職予定で、4月からは新たに修士課程に新入生1名の入学を予定しています。実験ベンチの確保や研究費のやり繰りが大変なところです。研究内容は、脂質性シグナル分子（スフィンゴ脂質、アラキドン酸・プロスタノイド）に関連した研究を細胞レベルで行っています。また、ここ数年、細胞内コレステロール異常疾患であるニーマンピック病、肺線維症、結腸癌な

どに焦点をあてて、上記の脂質シグナル系における治療標的の探索などを進めています。平成27年3月には藤野裕道准教授が、結腸癌増悪とプロスタノイドの研究成果により日本薬学会学術振興賞を受賞致しました。中村浩之助教は、治療標的の有効性を動物レベルで実証すべく製薬企業との共同研究を加速させております。創薬に少しでも貢献したいと研究室メンバーが頑張っているところです。



臨床薬理学

昨年4月より旧・高齢者薬剤学研究室は臨床薬理学研究室と名称を改めスタートしました。樋坂教授、佐藤（洋）助教に、今年1月より畠山浩人助教と事務補佐員が加わり、さらに学生、共同研究メンバーも増えつつあって、多様な研究テーマと活動がポストや学年を超えて豊かに交流し合う部屋です。研究としては、モデリングを適用し薬理・動態・生化学実験を駆使して、医薬品の開発・適正使用、バイオマーカーの発掘、治療効果の高精度予測などの医療への貢献を目指して日々励んでいます。恒例の4～6月の薬剤師卒業後教育研修講座は今年千葉大病院薬剤部と共催とし、例年の倍増の受講者を集めました。9月には研究室旅行で河口湖に出かけ（写真）、富士急ハイランドの手強い絶叫系に教授をはじめ果敢にチャレンジし、山梨の郷土ほうとう作りに陶醉し、ハーブ園では押し花工芸に勤しみました。11月には第9回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムを佐藤助教が大会長を務めて本学で



開催し、研究室総出で支えました。各自が真新しい気持ちで新体制に臨んでいます。

分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。わが国では高齢化や生活習慣の欧米化により循環器疾患の患者数は年々増加傾向にあります。これまでたくさんの治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者さんはまだ多くいらっしゃいます。特に心臓の働きが悪くなる重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して患者さんの役に立ちたいと思います。ゼ

口からスタートした研究室ですが、皆、仲良く頑張って研究を行っています。また、薬剤師向けに「心不全患者の在宅医療で活躍できる薬剤師の育成」講習会を開始しました。平成27年度は7回の講習会を開催し、座学だけでなく聴診器を使ったフィジカルアセスメントの実習や事例検討会なども行いました。平成28年度も引き続き開催しますので興味のある方は是非ご参加ください。

薬学部のホームページ等でご案内しますので宜しくお願いいたします。



ではなく病院薬剤部の先生方、共同研究先の先生方と切磋琢磨し研究活動を進めていきたいと存じます。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤 晃成教授、関根 秀一講師、青木 重樹 助教）、大学院生10名（博士課程6名、修士課程4名）、学部生（8名）の研究体制で、医薬品による毒性発現の分子メカニズムとこれに基づく毒性予測法開発に向けた研究に取り組んでいます。昨年4月に関根 助教が講師に昇任、学生では、今年の第9回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムにおいて薄田健史君が優秀発表賞を受賞しました。研究室内では、Tosapol君がタイ Chulalongkorn大学から交換留学生として1カ月間、研究室内での実験を経験し、帰国しました。今春3月末には博士課程への進学、製薬企業の研究職、開発職へとそれぞれの道を歩き始めております。また1月には学部3年生（3名）を研究室に迎え、4月には博士課程に2名が進学しており、新たな体制で研究がスタートしています。研究室HPも是非覗いてみて下さい。



医療薬学

医療薬学研究室には、平成28年3月現在、教員3名、大学院生5名、学部学生8名が在籍しております。慣れ親しんだ病院薬学研究室から医療薬学研究室に研究室名が変わりましたが、これまでと同様に脂質異常症とその合併症を中心に薬物治療の適正化に関する研究など勢力的に取り組んでいます。また、タコ焼きパーティー、薬学部ソフトボール大会への参加（本年度はサードベースまで踏みました。）など、研究以外の行事も一生懸命に楽しんでいます。今後も、研究室員だけ

社会薬学

平成27年度は、教員3名、事務補佐員1名、大学院生4名、6年生5名、5年生5名、4年生5名の23名です。当研究室の研究は、薬物治療などの臨床の課題を扱うため、研究の場は学内にとどまらず、様々な医療機関や研究施設と連携をもちながら進めています。研究を通じて共同研究先の先生方や、社会人の大学院生などから、多くの刺激を受けつつ、日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として、平成27年6月には「くすりの正しい飲み方：くすり」と安全に安心して付き合う～たいけん学習～」「薬物乱用防止に関するたいけん学習」を、8月には、「おくすり調剤体験～注射調剤を体験する～」を、9月には「薬物の害と私たちの健康」を開催しました。これからも学外の多くの方々とのつながりを大切に、社会との連携を深め、臨床の課題に取り組んでいきたいと思っております。



実務薬学

平成28年4月より稲川知子特任助教を迎え、関根祐子教授、大久保正人助教と合わせ教員3名、大学院生2名、6年生1名、5年生1名、4年生1名の総勢8名で新年度をスタートしました。

研究内容は、「先発点眼薬と後発点眼薬の比較」、「在宅現場で活躍できる薬剤師の育成」、「簡便かつ信頼性の高い家庭血圧測定・管理システムの構築」など臨床現場に近いテーマに加え「腎性低尿酸血症モデルUrat 1-Uox-double KOマウスにおけるアロプリノール中

断後急性腎障害の経日的経過」など基礎研究にも取り組んでいます。また、他研究室との共同研究も積極的に行っており、上記の在宅関係の研究は分子心血管薬理学研究室と、血圧管理システムの研究は東邦大学とのダイバーシティプログラムとして、腎性低尿酸血症モデルマウスの研究は帝京大学と共同で行っています。ちいさな研究室だからこそその教員と学生の距離の近い研究室を

目指して頑張っています。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



研究活動に邁進しています。11月に降幡先生が日本薬物動態学会奨励賞を、博士課程2年の橋本真理さんが、第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会 合同大会で若手優秀発表賞を、修士課程2年の伊藤涼君が The 11th ICCVB学会でベストポスター賞を受賞しました。今年は、千葉先生の退職年にあたり、2月に最終講義と祝賀会が、3月には同窓会が開催されました（写真）。



生化学

教員3名、学生18名、職員2名、総勢23名になりました。そのうち留学生が5名となり、必然的に研究室セミナーの言語は英語となりました。今年度は、伊藤教授体制になって初めてソフトボール大会に出場しました。結果は一回戦敗退でしたが、皆で楽しめました。また研究室旅行は浅草に行き、留学生と共に日本文化を堪能しました。研究面では培養細胞、ゼブラフィッシュ、ショウジョウバエを研究対象として、発生、成長、老化やさまざまな組織において、細胞同士のコミュニケーションを担うNotchシグナルの役割や機能について研究を進めています。引き続き、研究室員同士で切磋琢磨しながら日々研究活動に邁進していきたいと思います。



薬物学

平成26年3月現在の薬物学研究室の構成は、教員3名（千葉寛教授、小林カオル准教授、降幡知巳助教）、大学院生13名（博士後期課程8名、博士前期課程5名）、学部6年生1名、学部5年生5名、学部4年生5名（4年制2名、6年制3名）、学部3年生4名（4年制3名、6年制1名）、事務補佐員1名の計32名です。研究室のメインテーマは「薬物動態と薬効・毒性発現機構の解明及び予測法の確立」で、教職員、学生一同、日々

薬化学

卒業生の皆さん、最近の薬化学研究室の動向は以下の通りです。

☆2015年4月、根本哲宏先生が教授へと昇進し、根本研究室が発足しました。

☆2015年6月、濱田康正先生の退官記念祝賀会が盛大に行われました。タイからの留学生、Benz君が当研究室に加わりました。

☆2015年8月、恒例の研究室対抗ソフトボール大会で準優勝の好成績を収めました。

☆2016年2月、新たに3年生4名が配属されました。

☆2016年3月、鈴木君、山口さん、志賀君、兼平君、鶴田君が無事、学位を取得し社会に飛び立ちました。

2016年度は総勢20名で薬化学研究室を運営させていただきます。

写真：研究室学生メンバー



薬品合成化学

副学長を兼任する西田篤司教授をはじめスタッフ・学生の計21名で切磋琢磨しています。2月には4名の3年生が配属され、研究室も一段と若返りました。

森川君（博士後期2年、学振DC1）が半年間の米国UC Berkeleyへの留学を終えて帰国しました。中島君（博士後期2年）はアルカロイド合成での卓越した成果

により早期修了にて学位を取得し、4月から米国留学を予定しています(学振DC2からPDへ資格変更)。また、中島君はThe 2015 SciFinder Future Leaders in Chemistry Programに千葉大学から初めて選出されました。詳細は「化学と工業」12月号(Vol. 68, No. 12)をご覧ください。博士論文発表会での英語プレゼンテーションや国際学会での発表賞など、学生諸君が英語での情報発信に確実に自信をつけてきました。研究面では、新しい不斉反応の開発や複雑天然物の全合成を主眼に研究を展開しています。これらの研究に携わった大学院生は学会表彰も受けており、彼らの今後の活躍が楽しみです。



病態分析化学

病態分析化学研究室では、3名の教員(戸井田敏彦教授、西村和洋准教授、東恭平助教)、大学院生12名、学部学生7名が、それぞれ「信頼性・汎用性の高い分析法やDDSの開発」、「酸性糖鎖の構造解析」、「老化および疾患に伴う糖鎖変化」、「ポリアミンの生理作用」に関する研究に従事しています。最近のトピックスを紹介します。1)博士課程のSuabjakyong Papaweeさん、廣瀬直雄さん、葛丹さんが無事学位を取得することができました。2)葛丹さんはコンドロイチン硫酸と塩基性生理活性物質ポリアミンを混合して調製したポリイオンコンプレックスの有用性を初めて論文として報告しました。3)現4年生がプレ実験として、船橋漁港での水揚げが有名な出世魚・スズキ、および蜂の子から、珍しい糖鎖を見つけました。どんな生理作用をもつのか、更なる検討が期待されています。

今後も酸性糖鎖とポリアミンを融合させた新しい研究分野の開拓を目指しています。(文責:東)



製剤工学

最近の研究室トピックスを紹介します。

- ・2015年度も継続して、海外雑誌への論文発表数2ケタを達成しました。
- ・関連学会における発表で、教員と学生合わせて7つ

の優秀発表賞を受賞しました(植田助教、黒岩さん、金屋さん、大八木さん)。

・本年巣立った卒業生は、アステラス製薬(3名)、住友化学(1名)、日本ベーリンガーインゲルハイム(1名)で活躍しています。

・研究室のグローバル化が進んでいます。現在、中国からの留学生3名(劉さん、趙さん、陳さん)が在籍しています。2015年度は、タイの大学に3名が短期留学し、タイからは2名の学生を受け入れました。日本人の配属学生もTOEIC 730点を最低目標として英語力を研鑽しています。

・最近研究室ではスポーツが盛んです。コアタイム後にバトミントン、ボルタリングなどを行っています。日頃の運動の成果が現れたのか、昨年9月に行われた薬学部のソフトボール大会では、遂に念願であった一勝を挙げました。本年度も適度な運動を取り入れつつ、元気に日々の研究に邁進していきます。



微生物薬品化学

2015年8月に川島博人先生が教授として着任され、新生「微生物薬品化学研究室」として出発いたしました。免疫学、細菌学、糖鎖生物学の3つの学問を融合した新たな学問領域を立ち上げるべく、川島教授のもと、高屋准教授、ポスドク1名、大学院・学部学生13名が切磋琢磨し、研究に取り組みました。その成果を発信するべく、10月にはM2、B4の学生2名が学会発表を行いました。修士1年の学生1名は、2か月間ドイツ・ベルリンを訪問し、海外研究機関での研究活動を体験しました。修士学生2名と薬学科6年生1名は修士及び卒業論文発表を行い、企業での新たな生活をスタートします。日々研究活動に邁進する中、研究室旅行やスポーツ大会などでリフレッシュする時間もたくさんありました。3月からは平川助教が、4月からは新4年生5名、外部からの新大学院生1名が新たに加わり、現在のメンバーと共に生まれたばかりの研究室を成長させるべく、皆で協力しながら、楽しく真剣に研究に取り組んでいます。



予防薬学

平成27年度に新設された予防薬学研究室は、教員3名、大学院生3名、学部学生7名の陣容でスタートしました。新設された研究室とは言え、いろいろな事柄について移行期ということもあり、慎重な歩みを重ねてきた1年でしたが、いくつかの国際交流を行いました。10月にはJSTのさくらサイエンスプランによりインド工科大学ボンベイ校からSingh教授とDebasish博士が、11月から2月にかけてチリ教育省の支援によりバルパライソ・カトリック神学大学（チリ）から博士課程学生のVerdugo君が、2月から3月にかけてJSPSの短期招へい事業によりマドリードコンプルテンス大学（スペイン）からMadrid教授が来訪し、それぞれ講演、共同研究および研究打ち合わせなどを行いました。28年度からは本格的に予防薬学を志向した研究を展開していきたいと考えています。また衛生薬学関連の講義に加えて、3年次の実習も28年度以降は当研究室が担当しますので、衛生薬学教育にも責任を持って取り組んでいきたいと思っています。



生体機能性分子

27年度は高山廣光教授（薬学研究院長・薬学部長）、北島満里子准教授、小暮紀行助教と博士課程4名、修士課程11名、学部6年生2名、学部5年生1名、学部4年生5名の計23名の学生が在籍し、アルカロイドをターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組みました。これにより高山教授が日本生薬学会生薬学会賞「生物活性アルカロイドの探索・合成・創薬化学研究」を受賞しました。また昨年9月に岐阜で開催された日本生薬学会第62回年会において、6年生の丸山萌さんが優秀発表賞を受賞しました。

昨年11月25日から27日に幕張国際研修センターにて第33回メディスナルケミストリーシンポジウムを主催致しました。多数の製薬企業・大学から、招待講演を含む23件の口頭発表と133件のポスター発表をしていただき、700名ほどの参加者を迎え盛況のうちに終了致しました。

博士課程3年の東雅之君、高梨憲幸君が博士の学位を取得しました。学位論文の題目などにご興味のある方は研究室のHPをご覧ください。



分子画像薬品学

本研究室は、4名の教員と博士課程5名、修士課程5名、学部学生9名、秘書1名の総勢24名で構成されています。最近のニュースとして、昨年3月に博士課程を修了しました鈴木千恵さんが浜松医科大学の助教として赴任されました。今後のご活躍を期待しております。昨年9月にはインドネシアより留学生のHolis Abdul Holikさんが来日されました。国際創薬研究室Ashfaq Mahmood教授とも連携を取って、英語でのディスカッションが盛んに行われています。本研究室では、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めており、最近では、これら研究の両輪を融合したtheranostics (therapy + diagnostics) への展開も目指しています。コンパ、研究室旅行、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、いつでもお立ち寄り下さい。



活性構造化学

活性構造化学研究室では千葉県周辺で採取した土壌から放線菌を分離し、天然物を探索します。新規化合物を単離した場合は化合物名を命名する必要がありますが、これまでに千葉県の地名にちなんだ名前をつけました。例えば、イヌボシン（犬吠崎）、カトラゾン（香取市）、ヨウロウフェナジン（養老溪谷）、イズミフェナジン・イズミノシド（千葉市若葉区いずみの森）、イノハナミン（亥鼻公園）などです。これからも積極的に千葉にちなんだ化合物名をつけ、千葉を世界にアピールしたいと思っています。

写真は2015年9月の生薬学会（岐阜）の折のものです。2015年には2名の外国人研究者が当研究室に滞在しました。一人はエジプト・ヘルワン大学のモハメド・アブデルファター教授（JSPS外国人招へい研究者・長期）、もう一人はバングラデシュ・ダッカ大学のフィロジュー・アーメド教授（東京生化学研究会招聘研究者）です。2人の他、短期来日したバングラデシュ・クルナ大学シャミール・サドゥー教授と留学生2名の計5名の外国人が当研究室から発表しました。



2015年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制 44名

進学 43名 : 千葉大学42名、東京大学1名

学部6年生36名

進学 2名 : 東京大学

病院 11名 : 千葉大学医学部附属病院(2名)、群馬大学医学部附属病院、千葉西総合病院、船橋市立医療センター、総合東京病院、国立国際医療研究センター国府台病院、足利赤十字病院、国立国際医療研究センター病院、春日部中央総合病院、上尾中央医科グループ桜ヶ丘中央病院

企業 17名 : アサヌマコーポレーション、ウエルシア薬局、白十字(株)、富士薬品(株)、アステラス製薬(株)、(株)ウィーズ、日本製薬(株)、アイセイ薬局、シミック(株)、(株)新日本科学P.P.D.、小野薬品工業(株)、ファイザー(株)、Meiji Seikaファルマ(株)、ロート製薬(株)、チューリップ調剤(株)、(株)タカサ、日本調剤薬局(株)

公務員 5名 : 千葉県、さいたま市、豊島区、静岡県

未定 1名

修士修了 52名

進学 6名 : 千葉大学6名

企業 42名 : アステラス製薬(株)5名、Meiji Seikaファルマ(株)2名、広栄化学工業(株)、日本化薬(株)、日本製薬(株)、キッセイ薬品工業(株)、パレクセル・インターナショナル、東京化成工業(株)、中外製薬(株)、大鵬薬品工業(株)、クラシエ製薬(株)、積水化学工業(株)、日本コルマー(株)、三菱ガス化学(株)、住化分析センター、日本マイクロバイオファイマー、材料科学技術振興財団、住友化学(株)、日本ベーリンガーインゲルハイム(株)、清水メディカル(株)、兼松(株)、医薬品医療機器総合機構(PMDA)、帝人(株)、鈴榮特許総合事務所、ロシュ・ダイアグリスティック(株)、ニプロ(株)、大正製薬(株)、日本ケミファ(株)、鳥居薬品(株)、(株)マイクロン、(株)メディサイエンスプランニング、第一三共(株)、富士フィルムR.I.ファーマ(株)、ヤンセンファーマ(株)、日本たばこ産業(株)、エーザイ(株)、小野薬品工業(株)

公務員 4名 : 秋田県警察、千葉県、財務省関税局、特許庁

博士修了 15名

病院・企業等6名 : 千葉大学附属病院
持田製薬(株)、第一三共(株)、アトテックジャパン(株)、大鵬薬品(株)

ポストドクター6名 : 千葉大学2名、大阪大学、日本学術振興会、産業技術総合研究所、医療基盤・健康栄養研究所

帰国 2名

未定 1名

2016年度薬学部入学者の状況

入学者85名(男49名、女36名:推薦10名、前期60名、後期15名)

出身高校一覧

5名 市川(千葉)、渋谷教育学園幕張(千葉)

4名 県立千葉(千葉)

3名 千葉東(千葉)、豊島岡女子学園(東京)、両国(東京)

2名 竹園(茨城)、県立船橋(千葉)、開成(東京)、戸山(東京)

1名 札幌東(北海道)、札幌北(北海道)、八戸(青森)、盛岡第一(岩手)、宮城第一(宮城)、磐城(福島)、佐野(栃木)、県立浦和(埼玉)、市立浦和(埼玉)、開智(埼玉)、大宮(埼玉)、清真学園(茨城)、土浦第一(茨城)、並木(茨城)、稲毛(千葉)、芝浦工業大学柏(千葉)、成田(千葉)、成東(千葉)、千葉敬愛(千葉)、東邦大学付属東邦(千葉)、日本大学習志野(千葉)安田学園(東京)、共立女子(東京都)、渋谷教育学園渋谷(東京)錦城(東京)、駒場(東京)、光塩女子学院高等科(東京)、国分寺(東京)、桜蔭(東京)小石川(東京)、洗足学園(東京)、東京農業大学第一(東京)、都立武蔵(東京)雙葉(東京)、國學院大学久我山(東京)、フェリス学院(神奈川)、横浜翠嵐(神奈川)、横浜サイエンスフロンティア(神奈川)、桐蔭学園(神奈川)、桐光学園(神奈川)、湘南(神奈川)、逗子開成(神奈川)、聖光学院(神奈川)、浅野(神奈川)、沼津東(静岡)、静岡(静岡)、三条(新潟)、津南(新潟)、松本県ヶ丘(長野)、諏訪清陵(長野)、岐阜(岐阜)、藤島(福井)、武生(福井)、那覇国際(沖縄県)

今年度の受賞記録

<教員の受賞>

平成27年3月 学長表彰(千葉大学)植田圭祐(製剤工学)

平成27年3月 日本薬学会第135年会優秀発表賞(日本薬学会)植田圭祐(製剤工学)

平成27年3月 日本薬学会 学術振興賞 第4B部門(日本薬学会第135回年会)藤野裕道(薬効薬理学)

平成27年3月 優秀発表賞(第40回千葉東洋医学シンポジウム)佐藤洋美(臨床薬理学)

平成27年5月 日本薬剤学会第30年会最優秀発表者賞(日本薬剤学会)植田圭祐(製剤工学)

平成27年8月 ASPB TOP AUTHORS(米国植物生物学会)齊藤和季(遺伝子資源応用)

平成27年8月 第40回製剤・創剤セミナー Postdoctoral Presentation Award(日本薬剤学会)
植田圭祐(製剤工学)

平成27年9月 生薬学会賞(日本生薬学会)高山廣光(生体機能性分子)

平成27年10月 生薬天然物部会奨励研究賞(日本薬学会)吉本尚子(遺伝子資源応用)

平成27年10月 第31回製剤と粒子設計シンポジウム奨励賞(粉体工学会)植田圭祐(製剤工学)

平成27年11月 Lectureship Award(The 10th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia)西田篤司(薬品合成化学)

平成27年11月 奨励賞(日本薬物動態学会)降幡知巳(薬物学)

<学生の受賞>

平成27年3月	学生優秀発表賞 (日本薬学会第135年会 (神戸)) 大石健介 (活性構造化学)
平成27年3月	学生優秀発表賞 (日本薬学会第135年会 (神戸)) 赤嶺隆太 (活性構造化学)
平成27年3月	優秀口頭発表賞 (第135回日本薬学会年会) 米谷詩織 (分子細胞生物学)
平成27年3月	優秀口頭発表賞 (第135回日本薬学会年会) 長谷川仁美 (分子細胞生物学)
平成27年3月	優秀口頭発表賞 (第135回日本薬学会年会) 森井真理子 (分子細胞生物学)
平成27年3月	優秀口頭発表賞 (第135回日本薬学会年会) 幸龍三郎 (分子細胞生物学)
平成27年3月	優秀発表賞 (日本薬学会第135年会) 中島誠也 (薬品合成化学)
平成27年3月	修士論文優秀発表賞 (千葉大学大学院医学薬学府) 堀弘人 (薬品合成化学)
平成27年3月	年会優秀発表賞 (第88回日本薬理学会年会) 宇津美秋 (臨床薬理学)
平成27年3月	学長表彰者 (平成26年度千葉大学) 大石信雄 (臨床薬理学)
平成27年4月	なのはな賞 (学生版) 久保田翔子 (予防薬学)
平成27年5月	日本薬剤学会第30年会最優秀発表者賞 (日本薬剤学会) 黒岩洋佑 (製剤工学)
平成27年7月	Poster Award (11th International Conference on Cerebral Vascular Biology) 伊藤涼 (薬物学)
平成27年8月	ベストポスター賞 (第33回日本植物細胞分子生物学会 (東京) 大会) 森直子 (遺伝子資源応用)
平成27年8月	第40回製剤・創剤セミナー学生ポスタープレゼンテーション優秀発表賞 (日本薬剤学会) 金屋晴信 (製剤工学)
平成27年9月	小城海外派遣助成受賞 (日本生薬学会) 米山達朗 (活性構造化学)
平成27年9月	優秀発表賞 (日本生薬学会) 丸山萌 (生体機能性分子)
平成27年9月	優秀発表賞 (第14回次世代を担う若手ファーマ・バイオフィォーラム2015) 本田拓也 (分子細胞生物学)
平成27年9月	優秀発表賞 (第59回日本薬学会関東支部大会) 江森皓亮 (薬品合成化学)
平成27年10月	優秀発表賞 (第6回食品薬学シンポジウム) 金田結 (活性構造化学)
平成27年10月	第32回製剤と粒子設計シンポジウム奨励賞 (粉体工学会) 大八木直子 (製剤工学)
平成27年10月	若手優秀発表賞 (第133回日本薬理学会関東支部) 倉田直希 (薬効薬理学)
平成27年10月	優秀ポスター発表賞 (第5回CSJ化学フェスタ2015) 天児由佳 (薬品合成化学)
平成27年10月	優秀ポスター発表賞 (第5回CSJ化学フェスタ2015) 中島誠也 (薬品合成化学)
平成27年11月	優秀発表賞 (第9回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム) 薄田健史 (生物薬剤学)
平成27年11月	HETEROCYCLES AWARD (第45回複素環化学討論会) 河野将人 (薬化学)
平成27年11月	Outstanding Poster Award (The 5th Junior International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia) 堀弘人 (薬品合成化学)
平成27年11月	ポスター発表優秀賞 (第108回有機合成シンポジウム) 中島誠也 (薬品合成化学)
平成27年12月	若手優秀発表賞 (第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会 合同大会) 橋本真里 (薬物学)

薬友会より

薬友会ホームページは随時更新しています。今までの薬友会報が閲覧できるとともに、住所変更などもメールで連絡できます。

<http://www.p.chiba-u.jp/yakuyukai/>

平成27年 活動実績

- 3月 新入生入会案内 (新規終身会員110名)
- 5月 薬友会報25号発行
- 7月 役員会・常任理事会および第24回千葉大学薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催 (薬学部120周年記念講堂) (講師4名、参加者151名)
- 12月 役員会・常任理事会

平成28年 活動予定

- 3月 新入生入会案内
- 5月 薬友会報26号発行
- 7月 役員会・常任理事会および第25回千葉大学薬友会生涯教育セミナー
- 12月 役員会・常任理事会

お知らせ

薬友会のさらなる活性化のため、終身会員加入にご寄付をお願い申し上げます。

- 1) 終身会員：会費2万円、昭和48年に開設 (現在加入率約75%)。会員名簿CDを更新のたびに無料で配布いたします。
- 2) ご寄付：一口2千円から随時受付けています。特に、

終身会員会費が1万円であった会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。同封の振込用紙の通信欄の「終身会員」あるいは「寄付」に☑を入れ、氏名、住所、卒業年度をご記入いただき、<郵便振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会>にお願い申し上げます。

- 3) 名簿冊子：会員名簿の冊子体についてご希望がございましたら以下にご連絡下さい。総部数を確認後、有料にての領布を検討致します。

E-メール：yakuyukai@chiba-u.jp

F A X：043-226-2873

平成28年度各種委員会名簿

(○印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。)

総務委員会 ○西田 篤司、荒井 秀、原田 真至
村山 俊彦 (前委員長：アドバイザー)

財務委員会 ○伊藤 素行、溝口 貴正、殿城 亜矢子、村上 泰興 (S36)、高屋 明子 (前委員：アドバイザー)

名簿委員会 ○樋坂 章博、佐藤 洋美、村上 泰興 (S36)
高山 廣光 (前委員長：アドバイザー)

事業委員会 ○千葉 寛、小林 カオル、降幡 知巳、渡辺 楷 (S33)、高野 博之、関根 祐子 (前委員長：アドバイザー)

広報委員会 会報担当部門：◎佐藤 信範、小林 江梨子、櫻田 大也、渡辺 楷 (S33)、加藤 文男 (S47)、戸井田 敏彦 (前委員長：アドバイザー)
情報担当部門：○片桐 大輔 (H13)、小林 江梨子

第25回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日時：平成28年7月9日（土）

13：00～16：00

場所：千葉大学薬学部120周年記念講堂

（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）

〒260-8675

千葉市中央区亥鼻1-8-1）



・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面7番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗り、「千葉大薬学部前」で下車。約15分

主催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）

テーマ：「多方面で活躍する千大薬学OB・OG」

生涯教育セミナー

1) 「いま医療に必要な情報とは：社会的責任に基づいた製薬企業の取り組み」

橋詰 美里 先生（中外製薬株式会社）

2) 「新薬創製の夢を追って、30年」

千葉 雅人 先生（大鵬薬品工業株式会社）

3) 「有機合成化学から生命科学へのアプローチ」

袖岡 幹子 先生（理化学研究所）

宮木高明記念講演会

「薬剤師のリプロファイリング、リポジショニングの時代」

北田 光一 先生（日本病院薬剤師会）

終了後懇親会があります。 医薬系総合研究棟Ⅱ 大会議室（記念講堂の階下）

セミナー参加費 無料

意見交換会(懇親会)参加費 3,000円（当日）

参加申込み方法

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（薬物学研究室）小林カオルまでお願いいたします。

（電話/FAX：043-226-2895）

編集後記

本学部は、平成27年度にはじめて薬学6年制教育の質の保証を目的とした第三者評価を受けました。結果は「適合」でした。近年、大学における研究・教育について、このような外部評価を受ける時代になりました。

我々教員一丸となって今後も薬学教育プログラムの質的向上に取り組んでいきたいと考えております。在学生のみならず、千葉大学を目指す高校生や卒業生の声に耳を傾けていきたいと思っております。ご寄稿いただいた皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

（佐藤信範）

広報委員会 会報担当部門

佐藤信範（委員長）、小林江梨子、櫻田大也、渡辺楷（S33）、加藤文男（S47）、戸井田 敏彦（前委員長）